

『太平記』を読む 二

— 北条の終焉を語るスタイル —

山下 宏明

一 はじめに

名古屋から「東へ上って」最初に参加したのが『太平記』研究会であった。これまで若手を励まして来た成立論がきめ細かく論じられていた。わたくしの関心とは方向を異にしていた。わたくしの関心は、前稿『『太平記』を読む 一』で論じたように、成立論ではなく、古典の物語として『太平記』の語りを読むのが現代のわたくし自身の課題であることを述べた。そのために『太平記』の古態を考えるよりも、その歴史語りが「成立から編集を経て」種々、時代の太平志向が重ねられた集果の成果である流布本をとりあげ、その巻八まで読んで来たのだった。そこには『平家物語』を相対化して、「太平」を論じる物語の基盤に、現代の漫才を思わせる「笑い」が見られることを述べた。大津雄一が、兵藤裕己らを踏まえ「物語の抑圧」を論じたのであった。軍記物語の芸能化が進む。

その笑いは、例えば楠らの仕掛けた戦略に却けられた北条軍

『太平記』を読む 二(山下)

が、楠の策略を、そのまま後追いして失敗する、その「後追い」の失敗を笑うものであることを読んだのであった。

二 後醍醐をめぐる京都の状況と北条

船上山、後醍醐の動き(九の一) 幕府の手により隠岐島へ遷された先帝(後醍醐)が山陰、船上山へ復し、楠に指示して京都攻めに出る。この事態を六波羅探題が早馬で鎌倉の北条高時へ報せる。驚く高時が一門の高家を大将とし、北条家以外の「外様」の大名に召集を掛ける。その中に足利高時があった。

体の不調を感じていた足利高時に対し、北条は「催促度々に及ぶ。これを遺恨に思う高氏の思いに立ち入って語る。時代の動きが「貴賤位を」逆にする。もともと北条は桓武平氏の北条時政の「末孫」である。対する「われは源家累葉の族」、つまり清和源氏であると、源平対立の構図を持ち出す。この足利の思いを知ることもない北条高時は、京に上落させていた工藤高景に「一

日の中に「足利に二度も使者を立て、先帝への「反逆」を促す。受ける足利は「不日に」近日中に上洛すると返答。ところが北条幕府の要職にあった長崎入道円喜が足利一家の動きに不審の念を抱く。その足利が「源家の貴族として天下の権柄を捨てさせたまへる事久しければ」とは、承久の乱後の北条執権時代に源氏は不遇であった。乱世には臣従する者として主への忠誠を誓うべきもので、昔「木曾殿」義仲が、その子息清水冠者を頼朝のもとへ人質として指し出したように「足利殿の」子息と北の方を鎌倉に留め起請文を書かせるようにと促すとは、『平家物語』を踏まえながら足利高氏と北条の絆を保つための方策として物語を構成するのである。単なる引用ではない、基礎をなしている。

この長崎の進言に従い北条高時は、足利高氏に「幼稚の御子息」を人質として指し出すよう促す。ここで足利高氏は実弟直義に凶る。直義は兄の真意を察しながら、今の場合、誓詞を支えるはずの「仏神」もわれわれの志をおわかりくださるはず、「大儀の御計略」を考えるべきとして、足利高氏の次男、(幼名、千寿)義詮とその母、赤橋の妹登子に起請文を付して北条高時へ差し出す。かくて北条高時は気を許し、亡き頼朝の未亡人二位の禅尼から、源義家から相伝の「白旗」に、日頃、急の場の予備に乗り継ぎとしていた馬に、銀の縁取りをした鞍や、金作りの太刀まで添えて与えた。かくて、足利高氏兄弟以下、北条の重臣ら四十三人は、三千余騎で元弘三年(一二三三)三月二十七日、鎌倉を

出立。北条一門の名越高家が三日先立ち、四月十六日、「京都に着きたまふ」と一行の動きに敬語を使って語るのはなぜか。この敬讓表現(敬語)の使用は京都竜安寺に蔵される西源院本でも変わらない。一五〇年にわたって東国を拠点に王権を補佐して来た北条に対する思いが、その歴史語りの基盤にあったのである。足利高氏の本心を見抜けぬ北条高時一行の迂闊さ、それを乗り越える足利一門の動きを語り始めるのである。源氏が平家の北条を見放すことを示唆する語りである。

山崎・久我縄手の合戦(九の2) 楠らの動きに南北両六波羅探題の軍が勝ったので、世では「西国(赤松ら)の勢恐るるに足らず」と侮っていたものの、幕府が主力と期待していた結城親光が山崎に迫る赤松に加わったのを契機に関東方の国々が脱落し、楠方につく者が重なる。どうなるかと「世を」危ぶむ見方もあったが、北条の指示に従う足利・名越両軍の上洛に、「いつしか」早くも「心替はてて」とは、現状の持続を望む見方として、もう安心だとする思いが強くなったと語る。これが京の人々の本音であった。軍記物語を語るのに京の人々の声で状況を語るのである。

三 鎌倉幕府の行方

北条の思いを忖度する語り手 「かかるところに」足利が「京着

の翌日より「船上の先帝に志を寄せる旨を伝えたので、慶ぶ先帝は諸國に綸旨を送り「朝敵追討」を命じられた。語り手の敬讓表現は変わらない。それと知らず東国軍は八幡・山崎攻めを図る。代々北条の恩を蒙り、北条一門の赤橋家とも親戚になっていた足利を疑わず、ひたすら頼りにするが、それを「ことわりなり」とは、歴史を語る語り手としての思いを語る。「四月二十七日には八幡・山崎の合戦とかねてより定められければ」とは、戦の開始を北条視点で語る。名越を大将とする七千六百余騎が大手の軍として鳥羽の作道つくみちから攻め、一方、足利高氏の五千余騎が搦め手として西岡から南下を志す。先帝（後醍醐）方の千種忠顕は桂川が加茂川と合流する地に五百余騎で寄せ手を迎え討とうとする。関東軍から赤松に寝返っていた結城が三百余騎で狐川へ向かう。後醍醐方の赤松円心は三千余騎を率いて南北三か所に陣を張るが、数日前に「今上り」した一万余騎の東国軍を前に「戦ふべしとは見えざりけり」。見て来たような軍勢の数から、宮方の坊門雅忠は足利を心当てにしながら「もしたばかりやしたまふらん」とは、依然として足利を信じきれない坊門の胸の内であった。城南の地、寺戸と西岡に野伏ども五、六百人をかり集め、西京の大原野、岩蔵辺へ向かったと語る。語り手の思いは足利の動きにある。「やる程に」と時の経過を語り、場を次へ移す。搦め手であるはずの「大将足利は未明に京都をたちたまひぬ」との噂に「元より気早の若武者」大軍の大将、名越は久我繩手の「泥土の中へ」

『太平記』を読む 二（山下）

馬を乗り入れ、われ先にと進む。搦め手、足利の行動を先駆けするものと希望的観測する名越尾張守が「今度の合戦に」人を出し抜き功名をあげようとする。その名越の決意の程を語るために「鬼丸と言ひける金作りの」太刀に至るまで、その武装、いでたちを花やかに語りあげる寄せ手、赤松勢は、この名越一人をめがけて討つてかかるが、高家の堅固な鎧に矢は立たず、高家が得手とする太刀による奮戦に「数万の士卒」になっている官軍が追い払われてしまうように見えたと言語する。

ここで赤松軍の中の強弓速射の達人、佐用範家は、北条方の大将、尾張守名越を狙って、その冑の真つ向を射貫いて勝ち名乗り。守勢の名越勢は敗走。討ち死にする者、自害する者あり、「狐川の端より鳥羽の今在家まで」五十余丁にわたり、「死人尺地もなく伏しにけり」とは、凄惨な戦の成り行きを高見見物し、楽しむ戦物語である。

足利高氏が行方を見通す（九の3） 両六波羅も状況の変化に気づく。幕府方の大手の大将、尾張守名越らが奮戦する中、搦め手の大将足利高氏が桂川の西端へ降りて酒盛するとはどうしたことか。そして大手、大将名越の討死を聞くと戰場へ向かうどころか、山崎を見捨てて丹波路を西、篠村へと落ちて行く。その搦め手の中にいた備前の中吉なかよしが大将足利の動きに不審の思い。足利の動きを六波羅探題へ報せようとする。中吉に同行する撰津せんづの奴可ぬかが、このまま引き下がっては「余りに言ふ甲斐なく覚ゆ」とつ

て返し戦おうとするのを中吉が、「大勢」を相手に二、三十の小勢で戦っては犬死にするばかりだと制止、奴可も納得して六波羅へ足利の変身を報せる。六波羅の両探題は状況の変化に気づき、今は心を許せる人々も無くなったのを嘆くのだった。状況の変化、人々の動きに北条政権内でも気づき始める。

清和源氏、足利勢に加勢（九の4） 「さるほどに」篠村に陣取る足利高氏の勢に馳せ加わる久下時重が、その家紋、笠符に「一番」の文字をつけている。足利高氏が執事の高師直（たかしのちかひ）にその訳を質す。実は、その先祖久下重光が土肥杉山に兵を挙げた頼朝のもとへ馳せ参り、その時に頼朝から賜った旗印であることを知り、篠村に集まる勢が二万三千余騎になったと語る。源氏頼朝の影が見えるのである。去る「四月二十七日」、足利が動き始めた頃は「五千余騎」であったから、足利の勢の増大したことを語っている。状況を、天下分け目の大事と知った六波羅探題は、万一に備え都を鎌倉へ遷そうと主上（光厳）、上皇（後伏見・花園）、その兄弟の梶井尊胤までも六波羅へ遷す。これに同行する国母以下皇室の人々、仕える女房たちまで馳せ参るものだから、京の町中は「さびかへり」、白河がにぎわう始末、まさに世の無常・変化であったと語る。**世の変転を高見する姿勢で語る**のである。その笑いが聞こえて来る語りである。

光厳ら京の帝は、世の乱れを『史記』に説く「天子は四海を以て家とす」との教えに背くから日吉の祭礼、賀茂の祭礼も行われ

ずと嘆くのだった。「五月七日」、後醍醐に志を寄せる官軍が京を包囲するとの噂に六波羅両探題は、かくなつては東へ下るにも、東山道を山門の大衆に妨げられて脱出不能と嘆くのだった。かねて両探題は、京の備えの弱体化に戦意を失っていたと嘆く語り手である。**京の日常安泰を期する『太平記』の語り手**である。

八幡祈願とその成就（九の5） 「明くれば五月七日の寅の刻」と歴史語りの記録スタイルを保つ『太平記』。二万五千余騎の大軍を率いて出で発つ足利高氏が篠村の宿に八幡が祀られることに気づくとは、『平家物語』で木曾義仲が北国発向に埴生の八幡に気づき戦勝祈願するのと同じ**型の語り**である。その祈願の文書まで引いて「源朝臣高氏敬つてまうす」と閉じる、この願文が意を尽くす上に、高氏みずからが花押を押し、実弟直義もそろって上矢を献じた。その祈願が通じたのか、一行が大江山の峠を越える時、山鳩一対が飛び来たって、白旗の上を飛び、内裏へ向かって神祇官の前の櫓の木にとまったとは、これも一つの型である。この奇瑞を見て降参する者が多く、その勢は五万余騎になっていたと語る。

源平の対決（九の6） 六波羅方は六万の勢を神祇官・東寺・伏見の三方に分けて備える。内裏の内野では六波羅方の陶山・河野が控えるのに向かつて、足利方の設楽（しやらく）が進み出る。六波羅方の五十年配の老武者、斉藤玄基が設楽と戦って、両人が相討ちで果てる。足利方の大高重成が、河野や陶山を指名して相手にしよう

呼びかける。河野の甥養子が父を庇って大高と組む。その養子が討たれるのを見た河野が大高に組み、両者の郎等たちの混戦となる。これを語り手は、元はと言えばまたもや「源平」の争いだと読む。結局、数で勝る源氏の勝利、平家の敗退になったと語る。その間、元はと言えば足利の覇権欲と北条の保身の術が戦を起し世を動かしてゆくと語るのである。ここで視点を寄せ手、赤松円心に移して北条の備えを語る。三丈余りの堀の前に、渡りかねる赤松勢である。播磨の住人、妻鹿長宗の視点でその行動を語る。水の浅いのを知った家来の武部が主の肩に上がって岸に飛び上がるとは、これも『平家物語』巻四の橋合戦に見えた語りを下敷きにしている。そして防御の仕掛けとする屏柱を引き崩し平地としたと語るのが大げさな『太平記』の戦語りである。ここで城内の兵が「湿雲の雨を帯び」たように討つて出、佐用や赤松が味方を討たすなと討つて出る。語りのことばそのものが誇張に満ちて笑わせる。

敗走する六波羅軍 六波羅を攻める赤松軍の妻鹿と武部の活躍を「すはや討たれぬと見えければ」と戦いのめり込んでゆく語り手である。赤松軍の佐用・得平・別所が妻鹿を扶けようとする。攻める赤松円心父子が「二千余騎」を連れて攻め立て六波羅軍一万余騎の大軍を散々に破つて七条河原へ退き、洛中での戦になるのである。幕府方、伏見の竹田が敗れ木幡・伏見の軍も敗れて六波羅へ退く。五万余騎にもなった寄せ手、赤松が攻め立て六波羅を

『太平記』を読む 二(山下)

包囲しながら、鳥辺野から清閑寺への道を開けておいたとは、敵に進退を迷わせるための作戦だったと語るのは、戦の行方、経過を知り尽くした語り手である。寄せ手の千種忠顕は、千剣破を攻める六波羅軍がとつて返すのを考えて、すみやかに、この東寺合戦に、けりをつけようとする。出雲・伯耆からの先帝方の寄せ手は「雑軍二、三百両」をつなぎ積み上げて、火をかけ城門を焼き払う。一種のスペクタクルのような戦語りである。それを六波羅軍の梶井の軍、山門勢が、先帝方、小勢の三千余騎を河原三町に追いまくる。思えば、いまだに五万余騎を有する六波羅方が「志を一つにして」攻め立てれば、浮き立つ寄せ手も踏みこたえられないただろうに、「武家亡ぶべき運のきはめ」であったと、なりゆきを見通した語り手の思いそのままを語る。日頃、剛力を以て聞こえる強弓精兵も逃げ支度、まして日頃、戦を体験したこともない主上や女官、宮仕えの貴族たちは「おぢをの」くばかり。義のために命を惜しまず戦うのは、「わづかに千騎」にも及ばないと、語り手は一貫して六波羅軍の行方を対象化して語る。

北条一家の滅びへ(九の七) ここで糟谷宗秋が六波羅探題に東下りを進言する。このわずかの語りにも『太平記』は、朝吹いた風によって花見の宴をも中断せざるを得なかったと言う、晋の石崇の故事を引用する、『太平記』が得意とする、こうした語りや史学の大隅和雄は史籍学習を促すと言う訳である。中世文学会での発言である。

時に北探題であった北条仲時が、北の方に別れを促す。それも直接話法で語る。そなたは女の身、「松寿」こと子息の友時も幼い身ゆえ、北条の子息とは気づかれまい。暫く身を隠して時を待つようにと促す。同じような父子別離の場面が『平家物語』の宗盛父子にも見られた。その類型を借りた語りである。北の方は、わが身はいかになろうとも、ただ子息の行方が不安だとりすが。仲時も猛き思いを貫徹し、時を費やす。ここでまたもや漢籍『史記』「項羽本紀」、漢の高祖と戦う項羽が討ち死にを前に寵姫虞氏と四面楚歌の思いを吟じたことを想起し、その項羽が自害して果てたことまで語る。歴史を読む方法として**中国故事の読み**、漢籍を重ねて類推し、その原典の項羽の詩まで引くのは、引用の域を超えて故事そのものを語る。類推史観とまで論じられた『太平記』である。語り手の史観をまるごと見せる『太平記』である。百科辞書的な語りだとも言われる。

南探題、北条時益が仲時に出で立ちを促すのは、『平家物語』巻七、平家一門の都落ちに北の方との別れを惜しむ維盛に重なる語りである。都を落ちる一行が、捨てがたい六波羅に火を放って焼き払うのも『平家物語』巻七の平家都落ちそのままの語りである。

南探題の悲話 「五月闇」とは梅雨の闇夜、六波羅南探題の時益が東国へ向かう苦集滅道くじめだうを落ちる。これに野伏が十方から矢を射掛ける。首を射られて落馬する南探題の時益を糟谷そうや（時廣）が救

おうと首に立つ矢を引き抜いたものだから時益は出血多量死去。糟谷は、せめても主への忠義立て、主の首を切り、「錦の直垂」に包んで、往来の人に踏ませまいと「道のかたはらの田の中に深く」埋め、みずからも主の後を追って切腹、主の遺体に折り重なって死んだとは『太平記』の戦物語で、これを欠く本がある。『平家物語』とは違った、血の匂いが立ちこめる『太平記』で、小西甚一らが、『平家物語』とは違った、時衆が語る戦物語であると、時宗成立圏の課題にしようとしたのだった。保元・平治の戦とは違った、王朝内部が分裂して争う時代だった。

帝をも狙う野伏 北条の奉じる光厳帝一行の輿が四宮河原を過ぎ、北条を頼って東国へ下ろうと「東下り」するのを野伏が狙う。日野資名・勸修寺経顕・綾小路重資と禅林寺有光のみが帝に随行して、心細く「思ひを万里の東の道に傾」けると哀感を以て語る。源平時代の平家一門の都落ちを想像し、五月の短か夜に、杉の木かげにしばらくの休息。帝の左肘に立つ矢を陶山次郎が抜いて「御疵を吸ふ」とは応急の措置。血のおいがたちこめる『太平記』である。ようやく夜が明け始め、ふと見ると北山には五、六百人の野伏が矢を構える。「面々度を失つてあきれ」たと語るのである。

目先の物欲にかられる野伏 主上の行幸を導く備前の住人、中吉なかきち弥八が、行幸を妨げる野伏に道を空けよと促すが、野伏はあざ笑い、「御運すでに尽きさせ」たまう主上をただで通す訳にゆか

ぬ。お供をする武士どもは馬や武具を捨てて行けと促す。これが「野伏」の実態であった。怒った中吉は六騎の兵で「欲心熾盛の野伏ども」を蹴散らす。二十余人の野伏がとって返すのを中吉は、棟梁とおぼしい男に馬を乗りあわせて組み、兩人上下に成りながら「深田の中」へころび落ちる。組み敷かれる中吉が、相手を一太刀刺そうとするが、肝心の刀身が抜けて鞘が残るのみ。いよいよ相手が中吉の首を掻こうとするのを、中吉は六波羅の身分低いわれを討ったところで大した手柄にはなるまい。六波羅殿（探題）が隠す銅貨六千貫の場所を教えようと誘うと、野伏は中吉の命を救うのみか酒肴を勧め引き出物まで指し出すとは物欲そのものを語る。ところが中吉は相手を六波羅の焼け跡に案内し、ここに埋めたのに、だれかが掘って持ち去ったと作り笑いして帰ってゆく。中吉の戦闘を語るといよりも、目先の物欲に、戦功を無にする野伏の愚かさを笑いものにする。戦物語としての読みを虚仮にしかねない笑話の介入に野伏が関わる。これが『太平記』である。

主上（光厳）の一行から離脱する座主尊胤 中吉の策によって難を免れた主上は野洲の篠原宿に着き、粗末な網代輿に乗せられ、徒歩武者が下役人のように昇く。主上と行動を共にして来た座主尊胤はしばし身を隠そうと二人の役僧のみを具し、馬をも宿場の主に与え、伊勢の神官に扶けられて帰洛、紫野の白臺院に遁世の姿で過ごされたと語る。光厳の行方、光厳王朝の終幕を迎える。

『太平記』を読む 二（山下）

帝・探題の東落ちを妨げる溢れ者（九の八）「さる程に」と章段を始めるのは、前段、を受ける。両六波羅探題が鎌倉へと東落ちするのを、道中、「安宅」以下「番場・醒ヶ井・柏原」から伊吹山の麓、南は鈴鹿山の麓まで、東国へ向かう要所を「山賊・強盗・溢れ者」、まさに野伏に類する溢れ者が集まり、後醍醐の第五皇子、守良親王を大将に奉じる探題一行の東落ちを妨げる。夜が明けて探題仲時が見ると、二千余騎あつた勢が「わづかに七百騎」にも足らぬ小勢。糟谷を先駆けとして海道第一の難所、番場の峠にかかる。これを数千の溢れ者が妨げようとするのを糟谷は三十六騎で追い散らす、敵が大勢であるのに気力を失い、皆、馬を降り、麓の辻堂に息をつくとは、敗走する探題らの動きに思いに寄り添う語りである。**視点が目まぐるしく変わる。芸能化した軍談である。**

先行する陣に戦があると聞いた探題仲時が馬を早めて来たり、糟谷の思いを質す。糟谷は、京で討ち死にすべきであった。当面する敵のみならばとにかく、背後には土岐一族が美濃路を、吉良の一族が遠江に城を構えて待ちかける。数万の勢をもってしても道を開くのは困難、それにわれわれは人馬ともに疲れている。こは一旦、近江へ引り返し、関東勢の上洛を待つてはいかがと云う。探題仲時は、近江、佐々木の本心もわからない、その動きを待とうと言ひ、辻堂の広場に休む。頼朝以来、佐々木氏は近江、佐々木の守護職にあつた。その子孫である佐々木時信は、一行か

ら一里ばかり遅れ、「いかなる天魔破句のしわざ」か、先を行く探題の一行が「野伏ども」に包囲され全員討ち死にしたと語る者があり、今はしようがないと愛知川から引つ返し、すでに京を占拠する討手に降つたと語る。腰砕けに終わる戦の語りである。その探題、仲時は一向に佐々木はやって来ない、これはきつと「早」敵になった。かくなつては救われようがない、自害をして果てようと「気色涼しく」見えたとは、これまで死に臨んで禅的な姿勢を吟じる偈にも通じる、行方を見通す語りである。

『太平記』の語り手は、兵法に従つて行方を見通し、その見通しの当たっていることを、語りなおす。『平家物語』でも、斎藤別当実盛が大将宗盛の問いに東国武士の行動性を語る。そのように東国武士が動き、平家は実盛の語つたとおりに動き敗走するのだが、『太平記』の場合、兵法に即した戦法があつて、そのとおりになる経過を語って読者（聴衆）の緊張を解き、安堵させて笑いをかき立てる。これが『太平記』の戦の語りの方である。つまり**兵法の講釈が先行して**、これに従う敗者の行動を語るところに笑いが起こるのである。これまでに見た、楠正成の戦法に翻弄される北条軍が手痛い目に遭つて敗走する戦物語も、まさにこの兵法を踏まえて講談する語りであつた。仲時が、北条政権の行方（武運）を見通し、それを「平家一類の名」、武名を世に残すことを潔しとして「鎧脱いで」腹を掻き切つて伏す。それを見た糟谷が続き、以下、行動を共にした一行の名を連ね、「都合四百三十

二人同時に腹を」掻き切る。その語りには中国古典『旧唐書』があることまで明かす。これが講談としての『太平記』の戦語りがあつた。しかもその場を主上（光厳）らの宮廷人らが驚嘆して見ていることを語つて六波羅探題の終焉を達観して語り結ぶのである。この探題らの討死を「官軍力ヲエシママニ五月八日ノコロニヤ、都ニアル東軍ミナヤブレテ、アヅマヘココロザシテオチユキシニ、両院、新帝オナジク御ユキアリ、近江国馬場ト云所ニテ、御方ニ心ザシアル輩ウチイデニケレバ、武士ハタカフマデモナク自滅シヌ」と記録する『神皇正統記』とは異質の**軍談を講談する**『太平記』のスタイルである。

話す物語である戦物語が、書く物語になつて伝わり、それを談義する『太平記』である。

王朝の転換（九の9）かくて先帝（大覚寺統の後醍醐）方の「官軍」が、（持明院統の）光厳天皇、後伏見・花園両上皇を捕らえ近江の長光寺へ移し、王権のレガリア、聖なるしるしである三種の神器や王朝相伝の楽器までとりあげ、後醍醐王朝が保管した。それは秦王子嬰が漢の高祖に亡ぼされた際の成り行きに同じだったと語る。事件の経過に中国古典の世界を重ねて語る『太平記』の語りである。これを**類推史観**と称したのだった。

持明院統の重臣、日野資名が「遊行の聖」に会つて出家の介添えを依頼する。資名の願いとして、出家の際に用いる「四句の偈」を求めたところ、本来、仏徳を称えるべき偈に、聖は内容を

取り違え、畜生に向かって菩提心を起せとの意の偈を唱えた。その経過を「三河守友俊」が聞いて、その聖の狼狽した行為を笑ったと語る。その経過を語り手は、事の経過を語りながら、対象を突き放して語る、その落差が皮肉な笑いをかき立てることになった。

これまで持明院統の王朝に仕えた公卿としては、経顕・有光以外に同行する者がなかったと、この王統の脆さを語ることになったのだった。

北条の敗退を示唆する語り (九の10) 「さる程に」は、千劍破攻めの北条軍への話題転換。探題の滅亡、持明院統王朝の東下りの報せが、「翌日の午の刻」には千劍破へ聞こえていたとの語りは、明らかに幕府敗北を対象化して語る。千劍破城内の喜び、これを攻める幕府軍の失意を語る。この状態では、いよいよ「野伏」が勢いづくと恐れる幕府軍は千劍破攻めを断念し、南都に向かつて落ちる。道中、はかなんで自害する者、谷底へ落ちる者が「幾千万」あったとは誇張に満ちた語りである。しかも主だった大將は生存、南都へ「落ち着かれけれ」と敬語を使った語りは、**持明院統を支える北条に、一貫して敬意を捨てないで、巻九を閉じる構成である。**

四 討幕の動きと北条らの対決

足利高氏の動きと状況変化 (十の1) 足利高氏が倒幕側に廻ったとの飛脚の報せは「道遠ければ」まだ鎌倉に届いていない。「鎌倉には、かつてその沙汰も無かりけり」とは、迂闊な幕府。

この状況の変化を察知できない北条政権の滅びを見通した語りである。「元弘三年五月二日の夜半に」足利高氏の二男、千寿が行方をくまらしたと語るのは、明らかに前巻で足利が倒幕側に廻ったことを知らないと言ったのを受けている。つまり『太平記』は倒幕の経過を記録的に語るのではなく、ここで北条執権の滅亡を見通して、それに向けて足利がいかなる動きを示したかを語るために鎌倉の状況を語り始めるのである。単なる記録ではない。

鎌倉では、遠い京からは確かな情報が入って来ないと、桓武平氏である北条に仕えた長崎思元と、清和源氏、諏訪下社の神職、諏訪直性が使者になり上洛しようとする。一方、六波羅からの早馬が下るのが駿河の高橋で会い、名越高家の討死、足利の離反を報せる急使が会って、ともに鎌倉へ下る。

一方、京では足利高氏の長男竹若が、伊豆山権現から伯父良遍らと山伏姿でひそかに上洛されると敬讓表現を使って語る。長崎ら使者は(今の沼津の)浮島が原で前の京からの早馬が鎌倉へ下ると遭ってこれを生け捕ろうと戦い、良遍は自害し、竹若を刺し殺し、同行する十三人の首を刎ね浮島が原に掛ける。ここで足利ら

の動きを語るのを一旦中断する。

新田義貞の始動(十の二) 卷七(3)で先帝(後醍醐)から論旨を得て千劍破から仮病を使って関東へ帰国し謀叛を企てる義貞であった。それとも知らぬ北条高時は、京を攻めるために東国六国の莊園に臨時の出費を課した。中でも裕福な新田の多い世良田に六万貫を五日の間に整えよと責め立てる。これを勝手な挑発と怒った義貞は、北条からの使者二人を逮捕、一人を処刑、晒し首に掛ける。これを怒る北条の追求に新田は弟の脇屋義助と協議、「百六十余年」にわたる北条の庄政に使者を斬って捨てたのだから。それに新田はかねて先帝から論旨を得ていた。討死を覚悟で、鎌倉を攻めようと主張、一族三十余人が賛同、「五月八日」生品明神で改めて論旨を拝し、その氏族、十一名の勢揃えを語る。事の経過を語りながらそれが主力であるにしても「百五十騎」に過ぎなかった、今一步との思いを語り手である。この勢では心許ないと思う夕方、新田の一族、二千余騎が利根川の方から馬煙を立てて馳せ参る。この地名を掲げての勢揃えが、その語りの行方を示唆している。驚く新田義貞に対し、集まる勢が、これまで召しのないのを不審に思っていたところ、「天狗山伏一人」が越後に触れて回ったので、このように勢を揃えて参りました。遠方の者も明日には参りましょうと人馬ともに息を継ぐところへ、越後勢が、そして甲斐・信濃の源氏が旗を並べ掲げて五千余騎が参ったと語る。義貞・義助の兄弟は八幡大菩薩の擁護と慶

び、ただちに発向となる。この語りの息づかいが、この後を示唆しており、はたして紀氏が高氏の子息、さきに語っていた千寿王殿をも具して二百騎が加わる。平家琵琶の語りならば勇壮な〔捨〕の曲節で語るところである。「これより」上野以下、関東五か国の兵が「期せざるに集まり、催さざるに馳せ来たつて」その暮れ程には二十万七千余騎が胄を並べたとはいふ、さきの発向当時五月八日には「百五十騎には過ぎざりけり」とはうって変わる。四方八方、草の原から馬、旗の影がひらめき、敵の矢を防ぐ「母衣」を風が吹きなびかすと視覚を駆して語る。

新田の始動に連動する諸国の動き 新田義貞決起の報にに応じて、国々の早馬が走り始める、その倒幕の動きが次々と鎌倉へ届く。経過を知らぬ者は「鎌倉殿(探題)」に背くとは無謀なことと意に介さないが、「物の心をもわかまへたる人は」中国、呉王夫差を諫めた伍子胥の故事を引いて、この後の行方を語る。両者を語る**冷静な語り手**である。こうした状況にありながら、幕府はもっぱら、初めて倒幕の旗をあげた新田に期待するのみだったとは迂闊な北条である。「同じき九日」と日数が経過する中に状況の変化を見ようとする語り手。その「翌日の巳の刻に」幕府は金沢貞将の五万騎に上総・下総の勢を付けて敵の背後を突かせる。桜田貞国には長崎高重や、その孫たちを付け、武蔵・上野両国の六万を添え入間川へ遣す。語り手は、承久の乱以来、平穩であった世に、久しぶりに武器を動かすことになり、その武器が「かかやく

ばかりなり」と、またもや「ゆゆしき見物にてぞありける」と視覚を駆して、**対象を相対化**して語る。これが『太平記』の語りスタイルである。

両軍の対決 「同じき十一日」北条軍が武蔵小手差原から、相手「源氏」新田軍を見渡せば幾十万、桜田らは入間川に布陣。まず新田軍が渡河して鬨の声をあげ、幕府軍の「平家」も声を合わせ旗を差し上げて馳せ戦う。「いづれも東国武士」、三十余度の戦鬨に新田軍は三百あまり、鎌倉勢は五百余騎を討たれ、日暮れとともに明日の戦と申し合わせ、新田は入間川に、鎌倉勢は久米川に陣を引く。いづれも合戦の経過を語り合つて人馬の息をついたのだった。**源平合戦の展開を見物する語り**である。

対立する兵法を實行する中に幕府軍の敗走 夜が明けるや「源氏」の新田軍は「平家」の幕府軍に先手をうたれまいと久米川の陣を攻める。受ける「平家」も源氏の攻めを予想し、寄せ手を十分引き付けておいて戦えば有利であろうと、乗馬を固めて待機する。その**平家は陣形を開き、寄せ手を包囲しようとする**。新田軍は包囲されて分断されまいと陣形を固めて攻め入る。北条からすれば虎を縛する黄石公の**兵法**、新田軍からすれば鬼を押しつぶす張子房の兵法と、ともに相手の兵法を知った上での戦いである。北条軍は破られず、新田軍は困まれず、ともに千騎が一騎になるまで引くまいと戦い、「時の運にやよりけん」新田軍に死傷者は少なく、幕府軍は死傷者を多く出して、久米川の南方、分陪へと退

いた。新田軍は重ねて追いかけてしようとしながら、連日の戦に人馬ともに疲れを休めようと久米川の陣に進んで翌日の戦に備える。

中国の兵法を再現する中に、攻める新田軍が守る幕府軍を却けたと語る。**兵書を念頭に兵法に従い、その再現を語る戦物語**、『太平記』である。

勝ち戦に詰めを欠く幕府軍 十二日の久米川の戦に桜田貞国ら幕府軍が敗れたとの報に、北条高時は弟の恵性を大将とし、塩田ら十万余を分陪へ送つたので、敗軍が立ち直る。新田はそれと知らず「十五日」の未明、分陪を攻める。鎌倉軍はすぐれた射手三千人を前面に立て新田軍を射立てる。新田は敵の大軍の中に駆け入り、そしてとつて返し、蜘蛛の子を散らすように幕府軍を追つて攻め立てるが、援軍を得た幕府軍の反撃に遭つて新田軍に死傷者が多く出る。その新田軍を一步攻めれば新田が壊滅したのに、幕府軍は、ここまで攻めておけば、武蔵・上野の者が新田を討つて差し出すだろうと鷹揚に構えて時を移した。「これぞ平家の運の尽きぬるところのしるしなり」と**源平の戦いとして語り**を閉じる。最後の詰めを欠く**幕府軍の行方を予知する語り**である。

勝ち戦に油断する幕府軍 (十の3) 分陪で幕府軍に敗れた新田が途方に暮れる。そこへかねて新田に志を寄せていた相模の藤原・平家・村上源氏らが「十五日の晩景」新田の陣へ馳せ参る。

その中の三浦大和が語る。幾度の合戦を重ねるにしても、わが軍が加勢するから、一戦をするようにと促すと勝ちに奢る楚の武

信が秦の章邯に討たれた『史記』項羽本紀の故事を引いて新田に戦を促すのである。新田は喜び三浦に軍の指揮を委ねる。「明くれば五月十六日」の未明、幕府軍は数か度の戦に疲れ遊君を枕を並べ、あるいは酒宴に酔って寝る者もあるとは、『平家物語』巻五、富士川合戦を思い出させる。河原面おちてに敵の襲来を気づきながら、その三浦の勢を援軍だと慶ぶのは「運命の尽きぬる程こそあさましけれ」と、この後の行方を見通す語りである。

攻守ともに新田軍を感嘆 新田義貞は發返った三浦の先駆けに迫いすがつて、十万余騎を三方に分けて一斉に鬨の声を上げる。これに三浦は勢いづき周辺の坂東平家を七手に分け「蜘蛛手・輪違・十文字」の隊形を作つて攻めかけたものだから、幕府軍はちりぢりになって退く。大将左近入道は危うく討たれそうになつて踏みとどまる。代々北条に仕えて来た者や北条に声を掛けられる者が踏み留まつて討たれる者が続く中、大将左近大夫入道はようやく鎌倉に退かれたのであつたと、敬意を込め、丁寧語で語るのだった。高時の執事長崎高重は討ち取つた生首十三を家来に持たせ、鎧に立つ矢に出血を浴びた鎧姿で「しづしづと」鎌倉殿の屋形へ参る。これを嬉しげに迎える祖父高綱が負傷した孫の負傷跡に口をあてて血を吸つてやり、さすがわが孫と喜び、日頃厳しく扱つたことを詫げる、孫も感涙にむせぶのだった。

五 幕をひく北条

北条一門への哀惜。複雑な鎌倉の人々の思い 幕府が新田軍に手痛く攻められているところへ、巻九で語つた、六波羅探題が鎌倉を志して落ちる途中、近江の番場で自害して果てたとの報が、鎌倉の一同を悲嘆に暮れさせる。「しかりといへども」いまだに「この大敵（新田）を却けてこそ、京都へも討手を」上そうと「軍評定」した。この幕府の実情を「敵にしらせじと」したが、「隠れあるべきことならねば」新田軍がこれを聞いて大喜びするのであつた。

鎌倉攻防の態勢（十の4） 新田軍勝利の報に、六十万七千余騎の関東八か国の武士が参集、義貞はこの大軍を三手に分け極楽寺、巨福呂坂へ、新田みずからは粧坂けはらぎから北条を攻める。その状況を実感できない「鎌倉中の人々」である。北条軍の大手の大将、泰家が前日の夜、山内へ後退、搦め手の金沢貞将が鎌倉へ退くのを知つて「思ひの外なる珍事」と驚く。そのあげく「五月十八日」とは、大多和の新田への合流が「十五日の晩景」とあつたのを受ける。鎌倉を取り巻く、北は藤沢、南は鎌倉、五十余箇所箇所に寄せ手が放火して三方から攻める。鎌倉の人々が狼狽するありさまは、唐の玄宗皇帝が安祿山の乱で滅んだ状態だったと語る。鎌倉の攻防をめぐる戦の動きを鳥瞰し中国古典を重ねて語るのも『太平記』の型である。

討幕軍を三方にわたって迎え討つ北条は金沢・大佛、そして幕府最高の執権赤橋以下、「末々の平氏八十余人、国々の兵十万余」を弱所の備えとして鎌倉に残す。「同日の巳の刻（午前十時頃）」に始まる「終日、終夜」の新田の攻めと、これを迎え討つ鎌倉勢。両軍の矢叫び、忠節のために命を惜しまず、寄せ手は「魚鱗」「鶴翼」に隊形を整えて戦う。決死の攻防戦とは型どおりの戦語りで、「万人死して一人残り」いつ果てるともない類型通りの戦があったと語る。

北条方武将の思い（十の5） 足利高氏と縁戚関係にありながら北条方であって戦う赤橋守時は洲崎に向かつて戦い、六十五度の戦に「数万騎有りつる」郎従も三百余騎になりながら、南条高直に向かつて、漢の高祖が戦う度に敗れながら項羽を亡ぼし、晋の献公の息重耳が斉の国境に戦って国を守ったことを引き、「万死」に「一生を得」たことを言って励ます。さらに燕の太子丹に協力を乞われた高齢の田光が、自らの首を刎ねて命を絶った故事を引いて「腹十文字に切り」果てたと語る。

寄せる新田義貞の軍は洲崎を破り山内に馬を進めた。北条方にあつて、永年、大仏貞直の「恩顧」を蒙った本間城左衛門も「若党、中間百余人」を引き連れ、極楽寺坂を守る新田軍三万を攻め、大館宗氏の首を狙って討ち入り、寄せ手を腰越まで後退させる。本間の郎等がその宗氏の首を取る。本間は喜び、仕えて来ながら勘気を蒙っていた大仏貞直に赦しを乞い、その宗氏の首を呈

し、腹を掻き切つて果てる。敗色濃い北条方の赤橋や本間の覚悟の死を、見守る兵士たちの思いの中に中国故事を重ねて語る。『太平記』の**中国古典に寄せる濃厚な思い**である。

新田の、鎌倉への攻め（十の6） 極楽寺の切り通しへ向かう足利方の大館宗氏が北条方の本間に討たれ、同行した足利軍が片瀬・腰越まで退くとこの報せに新田義貞は（五月）二十一日の夜半とは、軍記としての記録を貫き片瀬・腰越を回り極楽寺坂へ進み、その義貞の視点で備え厳しい北条軍を見る。南の稲村が崎には「波打ぎはまで」逆茂木を掛け、沖には四、五町にわたって大船を並べて、鎌倉を狙う寄せ手、新田軍に備えている。ここで義貞は胃を脱いで神に祈る。逆臣のために四海を漂うわが君（後醍醐）を救おうと戦う、わが軍のために進路を開かせたまえと、自ら佩く「金作りの太刀」を抜いて海中に投げる。龍神が願いを納受されたか、おりから、月の入りの時に、稲村が崎が「二十余町干あがつて」平らな砂原となる。攻める新田軍を側面から射ようとする北条の軍船も沖へ離される。新田義貞は後漢の式師將軍や、新羅を攻めた神功皇后が干珠を以て干潮をひき起こしたという故事を念頭に、六万余騎の軍が一隊となつて真一文字に駆け通り鎌倉へ入る。北からの攻めもあつて、北条には防戦するすべもない。明らかに新田軍の勝利を、故事を踏まえて称える戦語りである。

予想外の寝返り劇 北条は「器量、事から（容貌）人にすぐれた」島津四郎を「相模入道」執権高時の館の近くに待機させてい

た。新田軍が若宮小路まで迫るとの報に、高時は島津を呼び「みづから酌を取」って、酒を勧め、関東無双の名馬「白浪」に、銀で前輪と尻輪を縁取りした鞍を置いてとらせる。門前からこの名馬に乗った島津が、日頃の重恩に応えるように駆けて出る。新田勢がわれ先に組もうとする。敵・味方ともに固唾を呑んで見る中に、意外や島津は馬を降り、胄を脱いで「おめおめと」降参して新田軍に加わったとは驚きである。この島津の行方がぎっくけとなつて寝返る者が続出。語り手自身が驚く語りである。まさに意外などんでん返しの戦、源平「今日を限り」の戦になるのである。戦語りを虚仮にする『太平記』の戦語りである。その語りは能を虚仮にする狂言に通底する。

高時、最後の戦（十の七） そうするうちに、鎌倉御霊社の前の浜、稲瀬川の河口の民家に掛けられた火が二十余箇所に延焼、そこから寄せ手「源氏の兵」が乱入して両軍、斬り合いとなり、逃れる者の混乱する様は須弥山上での帝釈天と阿修羅の戦、阿鼻叫喚のさま。その兵火が北条の館に迫り、諸大將の兵は、父祖代々の墳墓の地、東勝寺に充満する中、高時は「心しづかに自害」しようとする。

長崎父子の奮戦 北条軍の大將、長崎入道思元と為基の父子は極楽寺の切り通しへ向つて防戦するうちに、鎌倉殿の館に火をかけられたと見て、とつて返すのを新田軍が包围しようとし、北条軍に応戦。新田軍は一旦退いて人馬を休める。北条の館、東勝寺の

西方に馬烟りを見た長崎思元は決死の思いで、子息為基と分かれて遠くから射掛ける矢を身に浴びて、由比の浜の大鳥居で馬を降り、太刀の先を地に突き立てて仁王立ちに立つ。その太刀を恐れる義貞の兵は遠矢を射るばかり。為基は負傷したふりをして倒れ伏す。新田軍がその首をとろうと争い寄せるのを、昼寝を妨げるとはわが首がほしいのかと、血に染まった太刀で「鳴神の落ちかかる」ように戦うものだから、包围する五十余騎の兵も逃げ出す。この「二十一日の合戦に」北条軍の戦を「生死を知らぬ（顧みぬ）奮戦だと褒める語り手である。

大仏の、執権に寄せる忠節（十の八） 話題を極楽寺の切り通しを守っていた、北条軍の大將、大仏貞直に転じる。鎌倉殿は、執権高時の館に火の掛けられるのを見て、家来三十余人とともに武器を脱ぎ、一斉に切腹を遂げる。これを見た大仏は、その忠義に感じながら、一騎になるまで戦うのが勇士の本意だと二百余騎を具して六千余騎の新田軍に討ち入り、「六十余騎」になりながら「雲霞のごとく」に待ち構える新田軍の真ん中に討ち入り全滅する。

金沢の奮戦と討死 今一人の大將軍、金沢貞将も、鎌倉の北境、山内の合戦に八百余人が破られ、みずからも七カ所の傷を負つて、高時の「おはします、東勝寺」へ帰る。高時は慶び、金沢に六波羅両探題、さらには執権職に任命するとの認定書を贈る。金沢

は、これを鎧の右袋に差し込んで大軍の中へ駆け入って討死する。その認定書の裏には、『白氏文集』の詩を交えた謝辞が書かれていたと、敬語を連ねて語り、北条の結末に同情を寄せる語り手である。

浮世を捨てる執権、信忍（十の9） 粧坂けはばで防御に当たたる普恩寺入道信忍は、五日間にわたる合戦に郎従を失って二十余騎となり、子息仲時が六波羅を落ちて番場で切腹したことを思い、日頃たしなむ和歌を駆して「待てしばし死出の山辺の旅の道、同じく超えて憂き世語らん」と詠み、切腹を遂げた。十三代執権であるとその最期に思いを寄せる語り手である。

戦の実態は欲望（十の10） これも北条家の一人、義政の息、塩田俊時は、父、道祐に自害させようと、その子息俊時の遺体に、日頃読んだ経文を読み、生き残りの二百余人に防ぎ矢を射させ、藤原南家、伊東の一門狩野重光に館に火をかけよと言い含めて「腹十文字に」掻き切り子息俊時と同じ枕に「伏したまひける」。当然、主の後を逐うものと思っていた重光が、驚くことに亡き主人の武器を剥ぎ、家中の財宝を取り持たせ、臨済宗の総本山円覚寺の経蔵に身を隠す。この財宝があれば「一期不足」はあるまいと思つたのであろうが、天罰をこうむるのか新田の家来船田入道に攻められ刎ねられた。当然の結末と憎まぬ者がなかったと結ぶ。期待を裏切る人の実態に驚き呆れる語り手でもある。これが戦を戦う人の実態であると語る。政権の対立葛藤に時代の動きを

語りながら、その戦を生きる人々の欲望むき出しの実態を語る『太平記』である。

塩飽入道、北条に殉死（十の11） これも北条に仕えて来た塩飽入道聖遠が子息忠頼に、みずからは高時に殉じるが、そなたは、いまだ十分に執権の恩を蒙ってはいない。暫く身を隠して、わたくしの後生を弔い、「心安く一身の生涯」を暮らせと促す。子息の忠頼は、一門が命をつないで来たのも幕府の恩なのに、武運の傾くのを見て俗界を離れ、天下の笑い物になるわけにはゆかぬと、いずまいを正して自害。弟の塩飽四郎が兄の後を逐おうとするのを父入道が怒って切腹の順序を守れと制止。燃えさかる大火の中にも一筋の涼風を思うという、**禅的な辞世の頌**を残し、子息に首を切らせた。これは巻二、資朝の頌に通じる物語である。

安東聖秀、北条館で自害（十の12） 北条に仕える安東入道聖秀が稲村が崎の背後から回った世良田太郎の軍に敗れ、鎌倉殿（高時）の館跡でその視点で灰燼跡を見て茫然とし、自害を決意する。そこへ姪である義貞の北の方から助命の誘いがかかる。怒つた安東は漢の高祖に仕える王陵が、楚に生け捕られる母の助命を掲げて迫るのを母は王陵をわが身のゆえに迷わせまいと「みづから剣の上に」自死を遂げたことを想起して自刃して果てたと語る。故事引用による安東の自死を語る。故事類話の引用により安東を称揚する『太平記』である。

六 北条の滅び

北条一門の結末（十の13） 高時の弟、泰家に仕えた諏訪入道の息、盛高は主従二騎となり、父の宿所を訪ね、北条最後の「御供」をしようと決起を促す。ところが父入道は、高時の奢りが人望を失い、北条の滅亡は目の前、昔、斉が裏公の無道により滅ぶのを、臣の鮑叔牙が裏公の息、小伯を「取り立てて」桓公として斉を再興したという中国故事を引き、この場は生き残り、高時の二男、亀寿をもち立てて北条の再興に努めよと諭す。この間、高時の長男、万寿（邦時）は五大院右衛門の手でいずこかにかくまわれているので安心だが、この亀寿のことを思えば死にきれないと悲嘆する。亀寿を保護する（高時の妾）二位殿の局に訴え、実は五大院のかくまう万寿が小町口の在家で殺された。ついでに亀寿さまも、父、大殿（高時）のお手にかけて「冥土までも御供」をさせるようにと促す。聞く御局二位は、乳母の女房たちと亀寿にとりすがって泣き悲しむ。盛高は心をふるい立て、亀寿を大殿の手に委ねようと抱き取って出る。この盛高・亀寿、かれらにとりすぎる局や女房たちの動きを語りながら、馬を進める盛高から視点を二位局に移し（盛高らの）「後影も見えず成」り、これらの女房たちが古井に身を投げむなしくなると語る。しかも盛高が、この若君を諏訪神社の神官に託し、後日「建武元年」天下の大軍を起こし「中先代の大将」「相模二郎」になったと巻十

三を先取りして語る。北条に寄せる盛高らの懸命の忠節を語るのである。

この章段の冒頭に登場した北条四郎入道泰家は、清和源氏の南部太郎、藤原北家の伊達六郎を頼り、北条の館に火を放ち、泰家が自害したと見せかけ武蔵まで落ちる。残し置いた者が高時の自害を報せ、館に火を放ち、二十余人切腹して果てる。四郎入道泰家は逃げ落ち、西園寺（公宗）に仕え、建武二年六月の謀叛の大將になったのが、「この入道のことなりけり」と、これも後日を先取りする。後日を見通しての語りである。『太平記』の第一部とも言うべき北条の結末ながら、その後の展開にもいち早く気を配っている。

北条、最後の戦（十の14）「さる程に」とは、北条幕府の最後の迫る前段の語りから時の経過を語る。北条高時の執事高資の息、高重は、新田義貞が討幕の兵を挙げた武蔵野の合戦から数えきれない合戦を戦い、「今はわづかに百五十騎に成」る。正慶二年（二三三三）五月二十二日、源氏の新田勢が、各將軍を含む北条軍を破つたと聞こえたので高重は、疲れる馬を乗り換え、折れた太刀をはきかえ、三十二人を斬り、八度にわたり陣を破り、葛西谷に鎌倉殿高時を訪ねて拝顔、数度の合戦を戦ったが今は心だけく思っても叶いません、どうか敵の手にかからぬようお努めください。ただし高重がとって返してお勧めするまでは御自害めさるな、今一度戦って後に「冥途の御供」申した時の物語に語りま

しようと言い残して東勝寺を辞す。その後ろ姿に涙ぐむのは高時である。物語の冒頭で楠正成が後醍醐に語った決意と対をなす語りだとわたくしは読む。

その長崎二郎の決死の合戦と、鎧や馬などの装いを詳しく語り、高時が建立した崇寿寺に長老南山和尚を訪ね、庭に立ったまま禅の教えとしての勇士とは何でしょうかと、禅との縁で中国の俗語を使つて問う。和尚が刀の上に吹きかけた毛が切れてしまうほどに進めと、これも禅の頌の様式で応えるのを高重は耳の底に残して、ひたすら新田との直接対決するために笠符を投げ捨ててひそかに進む。それと知らぬ「源氏の兵」新田勢が高重を妨げることなく「おめおめ」と通す。義貞に迫るが、武蔵七党の由良新太郎が高重と気づき、とり逃がすなと三千余騎の武蔵七党の兵で包囲する。高重は、手はずが狂つたと、百五十騎の兵を具し、三千余騎の相手の軍を抜け駆けし、源氏をかき回して戦う。そのために義貞の兵は高重の居所をとらえきれず、多くが「同士討ち」する始末。寄せ手新田軍の動きよりも最後の戦として対決する北条軍を語る。ここで源氏、丹の党の一人長浜が、敵方としての笠符を付けぬ相手こそ長崎高重の兵だと教えて、「甲斐・信濃・武蔵・相模」の兵が長崎に討つてかかる。ここで中国、楚の項羽が漢の三将を破つた故事を引いて語る。主従八騎になった長崎は、組んでかかる武蔵の横山重貞を「あはぬ敵」と思い、冑の鉢から真つ二つに斬つて捨てる。続いてかかる庄為久をひっさげて投げ

飛ばし、その「人礫しつばくに」当たつた二人の武者が馬からさかさまに落とされたとは、長崎の腕力を語る。ここで長崎は先祖、桓武天皇からの血筋をあげて名のり、鎧・草刷を切つて捨て太刀を鞘におさめて鬚を切り「大童」になつて敵を駆け散らす。状況が切迫するのを見た郎党たちが、長崎の馬にとりすがり、今は高時に自害をと促すが、高重は、ついおもしろさに「大殿（高時）」との約束を忘れていたとは、長崎の戦鬪を語るのに夢中になる語り手である。『平家物語』には例を見ない戦語りである。主従八騎が「山内より」とつて返すのを、新田勢は、長崎が逃げるかと児玉党五百余騎が「手しげく」追うのを、見返して馬の向きをかえたと見た瞬間、十七度、「五百余騎を追ひ退け」「またしづしづ」と馬を馳せてゆく。葛西谷かさいがやに参つて見ると祖父の執事長崎円喜が迎えて、どうして今まで遅くなつたかとの問いに、義貞を狙つて二十余度戦つたが、とるに足らぬ「奴ら四、五百人」を斬り捨てました。殺生の罪が気にならなければ、「浜面へ追ひ出して」斬りまくりたかつたのですが「上（高時との）の御事」が気がかりで帰参しましたと「聞くも涼しく」語つたので、死に臨む人々も「少し心を慰みける」と語るのだった。戦を語るのに酔いしれ、わが身の勤めを忘れる語り手である。『平家物語』とは違つて、物語の行方を忘却しかねない、戦語りそのものを楽しむ語り手が、寄せ手新田軍の動きよりも北条一門の最後を語ることになる。

北条の一門以下、恩顧を謝する者の凄絶な自害（十の15） 章段

を改めながら長崎高重を語り続ける。高重は、鎌倉殿に「はやはや御自害候へ」、わたくしが「手本を見せまらせ」ましよう」と、高時の前にあつた杯をとり、まず実弟の新右衛門に酌をとらせて三度呑みほす。入道道準に「思ひざし」するぞ、これを着にと右の脇腹を切り口長く「掻き切つて」^{はらわた}腸を手で掻きだし、道準の前に伏す。道準は、いかなる下戸であつても、これを受けぬ訳にはゆかぬと盃を半分呑み残し、諏訪直性に杯を指して腹掻ききつて死ぬ。諏訪直性が「相模入道殿の前に指し置いて」とは、まのあたりに高時を前にして語るのである。若者どものみごとなるふるまいを見ては、老いの身としてもただではすまぬ、皆の者、これを着にせよと腹十文字に掻ききり、その刀を抜いて高時殿の前に置く。長崎円喜は、高時殿がいかげなざるかと不安な様子でみずからはまだ斬らなかつたが、実弟、長崎新右衛門が十五歳になる。その若さで父祖の武名を残そうと祖父円喜の脇腹を二刀刺し、その刀でみずからの腹を切り、祖父の遺体を引き寄せ、その上に重なつて伏した。この十五歳の若者に促され「相模入道も」腹を切り、城入道（安達時頭）が続き、館にいた北条一門や他家の人々も「雪の如くなる」肌を脱ぎ、思い思いの最後、「殊にゆゆしくぞみえたりし」と場の語りを結ぶ。

以下、その他、北条に殉じる人々の名を列挙し、北条の一族三十四人、塩田ら総じて一門、八十三人、われ先にと腹を切り、館に火を放つたので、中庭や門前にいた兵でも、父子、兄弟が刺し

ちがえ遺体が野辺に伏しむらがつたと語る。この一門に並び死んだ者があわせて八百七十余人、これを聞いて殉死する者、「すべて六千余人」とし「ああこの日いかなる日ぞや、元弘三年五月二十二日」と申すに（北条は）平家九代の繁盛一時に滅亡して、「源氏多年の蟄懐、一朝に開くることを得たり」と結ぶのは上述の源平対立、その平家、北条の滅びを以て戦物語を閉じる。北条の物語が完結する。

しかしこれでは、これまで見て来た物語を閉じるわけにゆかない。

七 『太平記』論の行方

『太平記』が軍記物語の中で、どのような位置を占めるかについては、早く「叙事詩論の課題」として、その傍観の文体と批評精神を論じようとした。長谷川端は、鈴木登美恵の諸本・成立論が進む中、みずからも諸本論に取り組み、中西達治・長坂成之・今井正之助らに学びながら、作者の政道観と思想、儒教的な名分論を読み解こうとした。兵藤裕己は、記述される時代の現実に向かいあう物語として講釈的な歴史観を「ヨム」という行為だと論じ、大津雄一は、軍記の機能を読者としてのわれわれに及ぼす「歴史的な欺瞞性、あるいは公正無私の、あるがままの「歴史」の不可能性を語るラディカルなテキストである」とした。近く、

北村昌孝は、当該時代の本質、その虚構を理解するための第一級の資料文ととらえ直そうとした。わたくしなりに言えば、本稿で、その枠組みとした『平家物語』を、いかに虚仮にしているかを見ようとしたのであった。

それらの研究の背後に、多くの成果のあることを顧慮しつつ、今、こうして改めてその「読み」を行うのである。

参考文献

- 兵藤裕巳『王権と物語』青弓社 一九八九年
 山下『いくさ物語の語りと批評』世界思想社 一九九七年
 長谷川端『太平記 創造と成長』三弥井書店 二〇〇三年
 大津雄一『軍記と王権のイデオロギー』翰林書房 二〇〇五年
 北村昌孝『太平記世界の形象』塙書房 二〇一〇年

キーワード…史観、基礎『平家物語』、虚仮

Abstract

How to read “Taiheiki”? 2: End of Hōjō clan

Hiroaki Yamashita

We have tried to find when and who edited “Taiheiki”.

But this time I have divided Taiheiki into three parts, the first of which was edited depending on “Heike Talese”. But narratologically speaking, it is a kind of rewrite of “Heikemonogatari”. I have been reading “Taiheiki” as a tale. This paper depends on Narratology.

Keywords: Historical ideal, “Heikemonogatari”, ideal